

平安初期歌合和歌の品詞比率

富士池 優美 (中央大学) †

Part of Speech Ratio of Japanese Poetry of *Utaawase* in the Early Heian Period

Yumi Fujiike (Chuo University)

要旨

和歌の品詞比率については、限られた音数の中での表現が求められるため名詞の比率が高いことが知られている一方で、一つのジャンルの中にも品詞比率にばらつきがあることも指摘されている。平安初期和歌のうち歌合と勅撰集を対象とし、『日本語歴史コーパス平安時代編』『歌合コーパス』の長単位データに基づく名詞率と MVR を用いて、和歌の内容の違いの品詞比率との関係を検討した。その結果、恋歌、季節歌といった和歌の内容により、品詞比率に差があることが明らかになった。また、散文との比較から、今回調査対象とした和歌のテキストの特徴は「要約的な文章」として位置づけられ、和歌の内容による品詞比率の差は文章のジャンルを超えるものではないことが明らかになった。

1. はじめに

文章のジャンルによって品詞の割合が決定されると考えられている。その中で、短歌や俳句といった形式は、限られた音数の中での表現が求められるため名詞の比率が高いことが知られている¹。その一方で、菅原優美 (2003) では、勅撰集 (八代集)、中古散文資料、私家集、歌合の和歌を対象に品詞比率を調査した結果、勅撰集の語彙が限定されており一様であるのに対し、散文資料・私家集・歌合の和歌語彙は多様であることを示した。つまり、和歌という一つのジャンルの中にも、品詞比率にばらつきがあるということになる。しかし、八代集、中古散文資料は年代の幅が広く²、品詞比率の違いが生じる要因が年代によるものなのか、詠まれた場や内容によるものなのか、わかりにくいところがあった。

本発表では、平安初期の主要歌合 3 作品の和歌を対象とし、同時代の勅撰和歌集である『古今和歌集』所収歌と比較することで、品詞比率からみた和歌の特徴を明らかにすることを目的とする。調査対象とするコーパスは、『日本語歴史コーパス 平安時代編』と、「中古中世歌合コーパスに基づく和歌評論の語彙論的研究」(研究課題番号: 25770179) で構築中の『歌合コーパス』である。「長単位」に基づく名詞率と MVR (100×相の類の比率/用の類の比率) を用い、和歌の内容の違いと品詞比率との関係を見出す。

† fujiike@tamacc.chuo-u.ac.jp

¹ 樺島忠夫(1979)

² 八代集でいうと、『古今和歌集』から『新古今和歌集』まで、約 300 年の開きがある。

2. 調査対象

2. 1 使用するコーパス

(1) 日本語歴史コーパス 平安時代編

2014年3月、国立国語研究所で構築された『日本語歴史コーパス 平安時代編』が公開された。収録作品は中古和文14作品（竹取物語、古今和歌集、伊勢物語、土佐日記、大和物語、平中物語、落窪物語、枕草子、源氏物語、紫式部日記、和泉式部日記、更級日記、堤中納言物語、讃岐典侍日記）である。データは小学館刊行の新編日本古典文学全集の本文に基づく。『日本語歴史コーパス』では、テキストを言語単位に分割し、品詞等の情報が付与される。採用した言語単位は、言語の形態的側面に着目して規定された「短単位」、構文的側面に着目して規定された「長単位」の2種類である。また、『日本語歴史コーパス 平安時代編』には「本文種別」として「会話」「手紙」「歌」「詞書」といった情報が付与されている。これを利用し、『古今和歌集』のうち、和歌のみを調査対象とした。

『古今和歌集』は905年醍醐天皇の勅命により撰ばれ、914年頃成立したとされる最初の勅撰和歌集であり、和歌約1100首を全20巻に収める。歌体は、長歌5首、旋頭歌4首を除き、すべてが短歌である。その所収歌は『万葉集』に次ぐ時代から『古今和歌集』撰者の時代まで、約140年にわたる。その歌風は、『万葉集』に次ぐ時代から850年頃までの「よみ人知らずの時代」、850年頃から890年頃までの「六歌仙の時代」、890年頃から成立までの「撰者の時代」の3期に分類される。「よみ人知らずの時代」の歌が約4割を占めるが、素朴でありつつも、撰者時代の美意識により撰ばれた歌と考えることができる。

(2) 歌合コーパス

発表者は現在、中古から中世初期にかけて歌合を対象としたコーパス『歌合コーパス』を構築中である。歌合とは、和歌を左右に分けてつがわせ、その優劣を判定した文芸的な遊戯である。平安時代中期の遊楽の中で代表的な行事となり、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて、特に高度な文芸の内容を持つ行事に発展した。この『歌合コーパス』で対象とする歌合は、平安初期の「寛平御時后宮歌合」^{かんびょうのおおんときさきのみやのうたあわせ}「亭子院女郎花合」^{ていじいんのおみなえしあわせ}「延喜十三年亭子院歌合」^{えんぎじゅうさんねんのていじいんのうたあわせ}、後世の歌合の手本となった平安時代の代表的な歌合である「天徳四年内裏歌合」、歌合の最高峰の一つと言われる鎌倉時代の「六百番歌合」である。歌合は序文・歌・判詞・日記等、多様な要素を持つため、必要に応じて検索が可能になるように、『日本語歴史コーパス平安時代編』の本文種別と同様に、序文・歌・判詞・日記の別や、題・番・左右といった情報を付す。また、和歌だけでなく、序文・判詞・日記を含めた歌合全体に対し、形態論情報を付す³。

本発表では、この『歌合コーパス』のうち、平安初期歌合3作品「寛平御時后宮歌合」「亭子院女郎花合」「延喜十三年亭子院歌合」を対象とする。本文は、新編日本古典文学全集11『古今和歌集』巻末の「平安初期歌合」を使用した。収録歌数は、「寛平御時后宮歌合」が

³ 『歌合コーパス』に付した情報については、富士池(2014a)を参照方。なお、形態論情報については、『日本語歴史コーパス平安時代編』と共通の仕様としている。

191 首⁴、「亭子院女郎花合」が 51 首、「延喜十三年亭子院歌合」が 80 首であり、歌体はすべて短歌である。成立年代は、「寛平御時后宮歌合」が 889～893 年の間、「亭子院女郎花合」が 898 年、「延喜十三年亭子院歌合」が 913 年であり、『古今和歌集』とはほぼ同時代である。これらの歌合の歌の一部は『古今和歌集』に入集している。この時代は「この九世紀の終りから十世紀の初めにまたがる二十年間が、平安朝の貴族和歌の典型が完成した時代である」⁵とされ、いわゆる「たをやめぶり」と言われる優美繊細で理知的な歌風の形成期に当たる。

2. 2 言語単位

ここで『日本語歴史コーパス 平安時代編』『歌合コーパス』で採用した言語単位について説明したい。『日本語歴史コーパス 平安時代編』の言語単位は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』で採用した単位を中古和文用に修正・拡張したものであり、『歌合コーパス』の言語単位も共通の仕様としている。採用した言語単位は、言語の形態的側面に着目して規定された「短単位」、構文的側面に着目して規定された「長単位」の 2 種類である。これまでに国立国語研究所が実施してきた語彙調査における言語単位のうち、短い単位の系列に属するものが「短単位」、長い単位の系列に属するものが「長単位」である⁶。

この 2 種類の言語単位のうち、本発表で用いるのは「長単位」である。長単位は文節を自立語と付属語に分割した言語単位である。原則として付属語を 1 長単位とする、助詞・助動詞を伴わない自立語は、主語・主題、連用修飾、連体修飾の各成分の後ろで切る等の規定に基づき、単位認定を行う⁷。長単位では合成語を認めており、結合回数の制限はないため、「木綿つけ鳥」「遊びありく」「時めき給ふ」「小野小町」といった語が 1 まとまりとなる。また、「あさましがる」「たへがたし」「うつくしげ」のような接辞を含めた形式が 1 長単位となる。『日本語歴史コーパス 平安時代編』では複合辞は認めていないが、係り受けを重視し付属語を切り出すのは不適切なものを連語として認めている。連語には「知らず読み」「我は顔」「事の他」等がある。長単位では文脈に即して品詞を付与する方針をとっており、同じ語に対して異なる品詞を与えることがある。例えば、「哀れ」の場合、「もののあはれ知りすぐし、」は名詞を、「皇子もいとあはれなる句を作りたまへるを」は形状詞を付与するといった判別を行っている。図 2-1 に長単位例を示す。調査対象となる「歌」の部分に網掛けを付した。

⁴ 一般に 190 首とされるが、96 番歌が秋歌と冬歌とに重出しているため、191 首とする。

⁵ 新編日本古典文学全集 11 『古今和歌集』解説 (p.513)

⁶ 小椋ほか (2011) 第 1 章参照。

⁷ 中古和文における長単位認定の概要に関しては富士池 (2012) 参照。

キー	語彙素(L)	語彙素読み(L)	品詞(L)	活用型(L)	活用形(L)	本文種別
題	題	ダイ	名詞-普通名詞-一般			詞書
しら	知る	シル	動詞-一般	文語四段-ラ行	未然形-一般	詞書
ず	ず	ズ	助動詞	文語助動詞-ズ	終止形-一般	詞書
読人	読み人	ヨミヒト	名詞-普通名詞-一般			詞書
しら	知る	シル	動詞-一般	文語四段-ラ行	未然形-一般	詞書
ず	ず	ズ	助動詞	文語助動詞-ズ	終止形-一般	詞書
心ざし	志	ココロザシ	名詞-普通名詞-一般			歌
深く	深し	フカシ	形容詞-一般	文語形容詞-ク	連用形-一般	歌
そめ	染む	ソム	動詞-一般	文語下二段-マ行	連用形-一般	歌
て	て	テ	助詞-接続助詞			歌
し	し	シ	助詞-副助詞			歌
をり	折る	オル	動詞-一般	文語四段-ラ行	連用形-一般	歌
けれ	けり	ケリ	助動詞	文語助動詞-ケリ	已然形-一般	歌
ば	ば	バ	助詞-接続助詞			歌
消えあへ	消え敢う	キエアウ	動詞-一般	文語下二段-ハ行	未然形-一般	歌
ぬ	ず	ズ	助動詞	文語助動詞-ズ	連体形-一般	歌
雪	雪	ユキ	名詞-普通名詞-一般			歌
の	の	ノ	助詞-格助詞			歌
花	花	ハナ	名詞-普通名詞-一般			歌
と	と	ト	助詞-格助詞			歌
見ゆ	見ゆ	ミュ	動詞-一般	文語下二段-ヤ行	終止形-一般	歌
らむ	らむ	ラム	助動詞	文語助動詞-ラム	連体形-一般	歌

図 2-1 長単位例

3. 名詞率と MVR

本発表では、品詞比率に基づきテキストの特徴を示す指標として、名詞率と MVR を用いる。名詞の比率は文章の特質を表し、名詞の比率に応じて他の品詞もある傾向を持って変化する、つまり文章のジャンルによって品詞の割合が決定されると考えられる。ここでは延べ語数を用いて、品詞比率を求める。樺島忠夫・寿岳章子(1965)は、自立語について品詞をその機能によって体(名詞)・用(動詞)・相(形容詞・形容動詞・副詞・連体詞)・他(接続詞・感動詞)の四つに分類したとき、体の類と、用・相それぞれの類の関係を見るにあたり、MVR という「 $100 \times \text{相の類の比率} / \text{用の類の比率}$ 」の式で表される指標を提案し、名詞率と MVR の組み合わせから見出せる文体的特徴として、名詞率が高く MVR が小さいものを「要約的な文章」、名詞率が低く MVR が大きいものを「ありさま描写的な文章」、名詞率が低く MVR も小さいものを「動き描写的な文章」と位置づけた。『日本語歴史コーパス 平安時代編』の品詞体系では、体の類に「名詞-普通名詞-一般」「名詞-固有名詞-{一般・人名・地名}」「名詞-数詞」「代名詞」が、用の類に「動詞-一般」が、相の類に「形容詞-一般」「形状詞-{一般・タリ}」「副詞」「連体詞」が分類される。

歌の内容の違いに着目するために、『古今和歌集』は巻ごとに⁸、「寛平御時后宮歌合」「延喜十三年亭子院歌合」は題ごとに、「亭子院女郎花合」は一つとして集計した。ここでは『古今和歌集』の巻、「寛平御時后宮歌合」「延喜十三年亭子院歌合」の題を「部立」と呼ぶこととする。「亭子院女郎花合」はその名のとおり花合であり、その歌の題はすべて女郎花、つまり秋の花である。「亭子院女郎花合」から『古今和歌集』に採録された歌はすべて巻第四(秋歌上)にあり、行事の歌であると同時に、秋の歌と言える。資料・部立ごとの歌数・名詞率(%)・MVR を表 3-1 に、表 3-1 に基づく資料・部立ごとの名詞率(%)・MVR の散

⁸ 墨滅歌(俊成本において見せ消ちにされた歌)は調査対象外とした。

布図を図 3-1 に示す。

図 3-1 から、一口に和歌といっても品詞比率には違いがある様子が見てとれる。

まず、内容について検討していきたい。大きく分けて、恋歌は名詞率が低く MVR が大きい「ありさま描写的な文章」、季節歌は恋歌と比較すると名詞率が高く MVR が小さい「要約的な文章」と見ることができる。この傾向は、歌合の歌と『古今和歌集』所収歌との間に差はなく、資料の違いではなく内容の違いと考えられる。季節歌の中を見ると、夏歌は名詞率が低く MVR が大きくなっている一方で、春・秋・冬歌は名詞率が高く MVR が小さくなっている。ここから、品詞比率から見る限り、夏歌は季節歌の典型から離れていると言える。夏歌の大部分はほととぎすを詠んだ歌であり、縁語など相の類が増える要素は特にない。夏歌の MVR が大きくなる原因は不明である。秋歌は同じ『古今和歌集』でも上下で品詞比率に差が見られる。恋歌と季節歌以外は内容による差が大きい。離別歌は名詞率が低く MVR も小さい「動き描写的な文章」と見ることができる一方で、大歌所御歌・神遊びの歌・東歌は最も名詞率が低い「要約的な文章」と見られる。また、「亭子院女郎花合」は行事の歌であると同時に秋の歌であると考えられるが、賀歌とも秋歌とも離れた中間的な位置付けとなった。

表 3-1 資料・部立ごとの歌数・名詞率(%)・MVR

資料	部立	label	歌数	名詞率	MVR
古今和歌集	春歌 上	古_春上	68	57.76	17.79
古今和歌集	春歌 下	古_春下	66	55.19	18.05
古今和歌集	夏歌	古_夏	34	57.75	26.74
古今和歌集	秋歌 上	古_秋上	80	58.82	22.58
古今和歌集	秋歌 下	古_秋下	65	59.89	17.49
古今和歌集	冬歌	古_冬	29	56.05	17.20
古今和歌集	賀歌	古_賀	22	59.35	21.15
古今和歌集	離別歌	古_離別	41	47.73	18.38
古今和歌集	羈旅歌	古_羈旅	16	56.07	20.51
古今和歌集	物名	古_物名	47	53.60	27.94
古今和歌集	恋歌 一	古_恋1	83	54.47	30.58
古今和歌集	恋歌 二	古_恋2	64	55.76	24.61
古今和歌集	恋歌 三	古_恋3	61	49.90	32.12
古今和歌集	恋歌 四	古_恋4	70	52.96	27.36
古今和歌集	恋歌 五	古_恋5	82	52.38	28.40
古今和歌集	哀傷歌	古_哀傷	34	57.52	29.89
古今和歌集	雑歌 上	古_雑上	70	55.56	26.53
古今和歌集	雑歌 下	古_雑下	68	57.72	29.21
古今和歌集	雑躰歌	古_雑躰	68	56.31	28.88
古今和歌集	大歌所御歌・神遊びの歌・東歌	古_大・神・東	32	64.79	20.51
寛平御時后宮歌合	春歌	寛_春	40	55.56	16.42
寛平御時后宮歌合	夏歌	寛_夏	36	56.69	27.10
寛平御時后宮歌合	秋歌	寛_秋	49	58.38	21.01
寛平御時后宮歌合	冬歌	寛_冬	37	55.21	13.18
寛平御時后宮歌合	恋歌	寛_恋	38	49.68	24.60
亭子院女郎花合		女郎花	51	52.53	23.35
延喜十三年亭子院歌合	春歌	亭_春	40	53.13	17.16
延喜十三年亭子院歌合	夏歌	亭_夏	19	56.95	25.00
延喜十三年亭子院歌合	恋歌	亭_恋	21	52.43	33.33

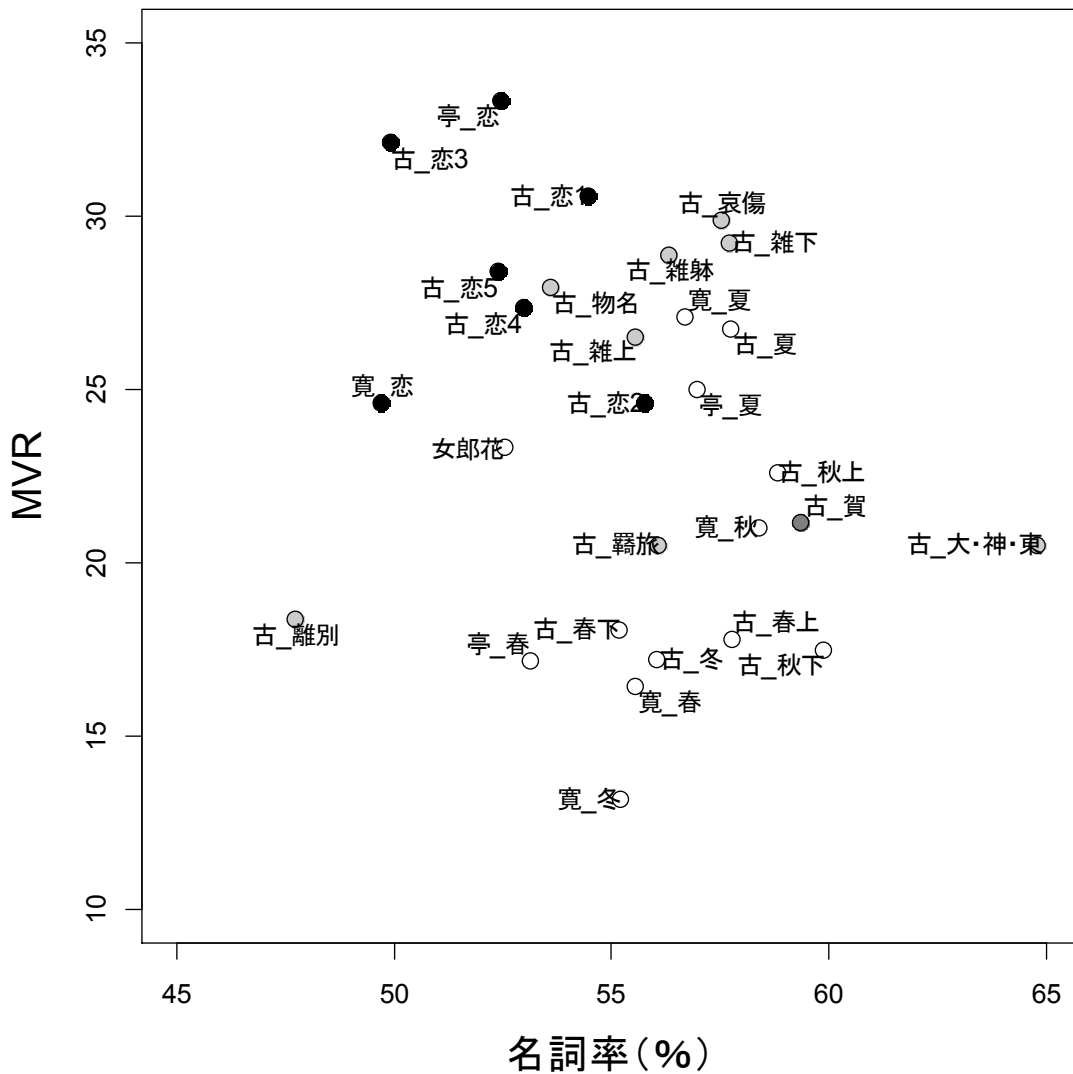


図 3-1 資料・部立ごとの名詞率 (%)・MVR の散布図

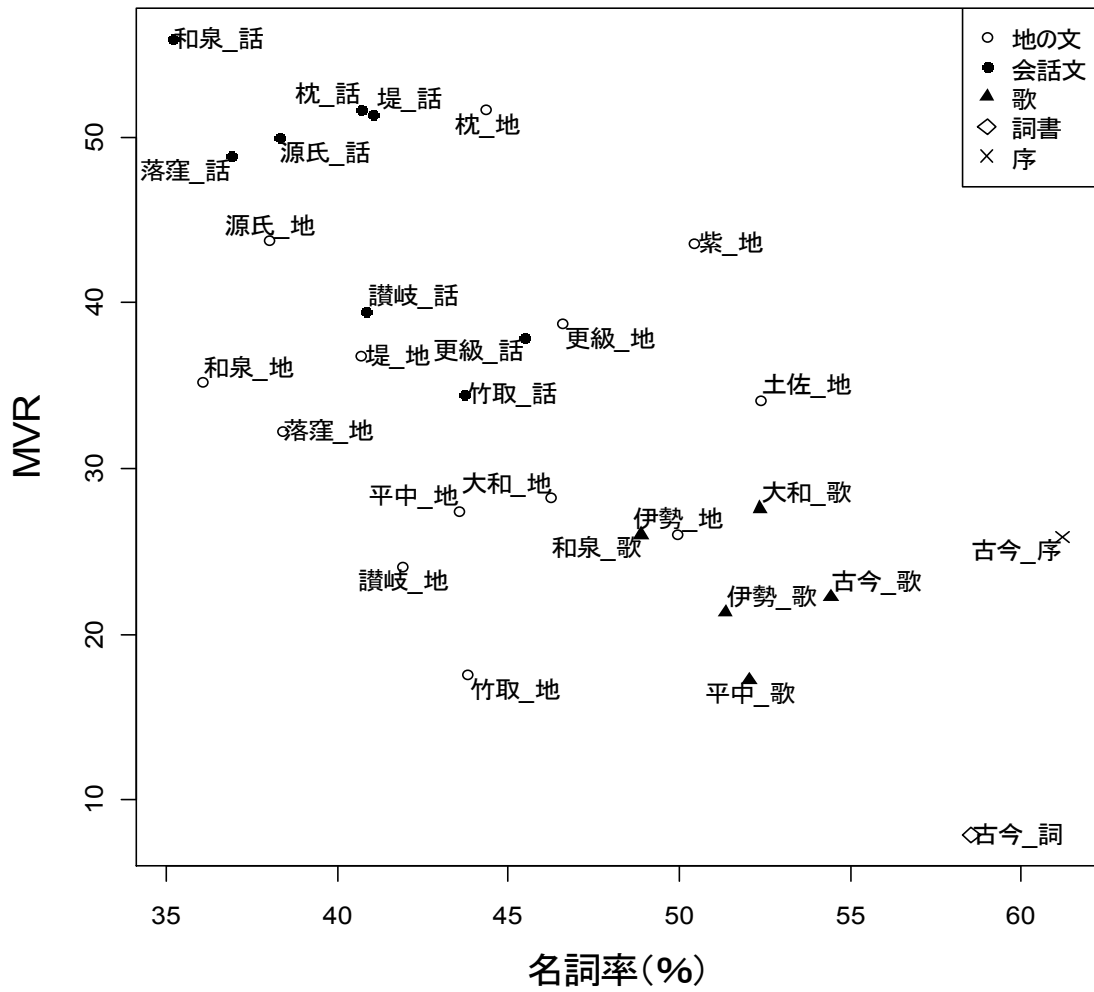


図 3-2 中古 14 作品の名詞率 (%)・MVR の散布図

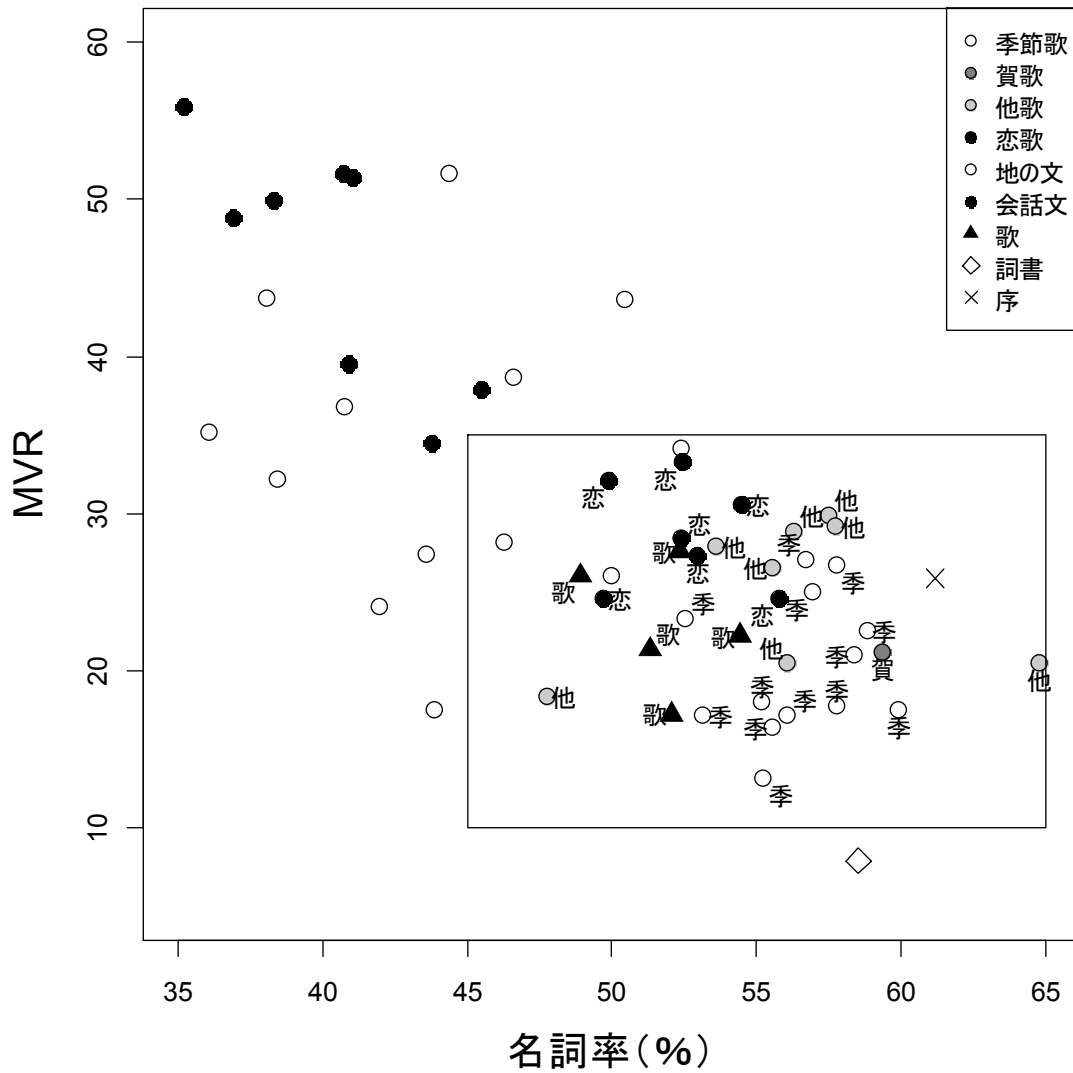


図 3-3 中古 14 作品と古今和歌集・平安初期歌合の名詞率 (%)・MVR の散布図

次に、形式について検討する。限られた音数の中での表現が求められる場合には名詞の比率が高いことが指摘されているが、今回の調査ではどのようなになっているのだろうか。長歌や旋頭歌といった短歌以外の形式を含む部立は雑躰歌である。図 3-1 を見ると、雑躰歌の名詞率は和歌の中では中程度である。68 首中長歌 5 首、旋頭歌 4 首を含むが、自立語の延べ語数でいうと、長歌が 38%、旋頭歌が 4% を占める。五七七五七七の形式である旋頭歌はともかく、長歌は五七調ないし七五調という音数律を持つものの、長さの制限はない。長歌のみを抽出して集計すると、名詞率 57.78%、MVR 26.95 となる。長さの制限がない長歌の名詞率は今回の調査結果の中ではやや高い方と言える。長歌 5 首と少ないサンプルではあるが、今回の調査結果からは音数の制限と名詞率の高さの関連は見られなかったということになる。

それでは、これらの和歌の品詞比率を、散文の品詞比率と比較するとどのような位置付けになるのだろうか。富士池 (2014b) では『日本語歴史コーパス 平安時代編』に基づく中古和文 14 作品の名詞率と MVR⁹を示した。図 3-2 に中古和文 14 作品の名詞率・MVR の散布図を、図 3-2 と今回の調査結果を重ね合わせたものを図 3-3 に示す。図 3-3 中の四角囲み部分が、図 3-1 の範囲に当たる。富士池 (2014b) では「要約的な文章」として、物語・日記所収の和歌と『古今和歌集』詞書・仮名序を挙げた。図 3-3 からも『古今和歌集』と平安初期歌合の和歌は、会話文や地の文と比較して名詞率が高く MVR が小さい「要約的な文章」であることが見てとれる。和歌の品詞比率はその内容によって異なる様子が見てとれたが、文章のジャンルを超えるものではないと言える。

4. おわりに

本発表では『日本語歴史コーパス 平安時代編』『歌合コーパス』の「長単位」データを用い、テキストの特徴を示す指標として名詞率と MVR を算出した。この指標に基づき、平安初期歌合 3 作品「寛平御時后宮歌合」「亭子院女郎花合」「延喜十三年亭子院歌合」と、同時代の勅撰集『古今和歌集』の和歌について、和歌の内容の違いと品詞比率との関係という観点から検討した。その結果、恋歌、季節歌といった和歌の内容により、品詞比率に差があることが明らかになった。その一方で、形式について検討したところ、長さの制限がない長歌の名詞率はやや高く、限られた音数の中での表現が求められる場合には名詞の比率が高いというこれまでの指摘とは異なる結果となった。また、散文との比較から、今回調査対象とした和歌のテキストの特徴は「要約的な文章」として位置づけられた。ここから和歌の内容による品詞比率の差は文章のジャンルを超えるものではないことが明らかになった。

今回は平安初期和歌に限定して調査を行った。菅原 (2003) では八代集において新しいものほど名詞率が高くなる傾向が見られた。歌風の変遷とともに、品詞比率も変化すると推測される。成立年代や歌風の変遷と品詞比率の関連については、今後の課題としたい。

⁹ 『古今和歌集』は歌・詞書・仮名序に、他の 13 作品は地の文・会話文・歌に分けて集計し、各作品の延べ語数の 20%以上を占める場合のみを示したもの。

付 記

本発表は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「通時コーパスの設計」、JSPS 科研費「中古中世歌合コーパスに基づく和歌評論の語彙論的研究」(研究課題番号: 25770179) の成果の一部である。

文 献

- 小椋秀樹・小磯花絵・富士池優美・宮内佐夜香・小西光・原裕 (2011) 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報規程集第4版」国立国語研究所内部報告書(LR-CCG-10-05-01)
http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/doc/report/JC-D-10-05-01.pdf
- 小沢正夫・松田成穂 校注・訳 (1994) 新編日本古典文学全集 11 『古今和歌集』(小学館)
- 樺島忠夫・寿岳章子 (1965) 『文体の科学』(綜芸舎)
- 樺島忠夫 (1979) 『日本語のスタイルブック』(大修館書店)
- 菅原優美 (2003) 「平安時代和歌の語彙の量的構造」『国文目白』42、pp.1-9
- 富士池優美 (2014a) 「中古中世歌合の構造化」『言語処理学会第20回年次大会発表論文集』、pp.205-208
- 富士池優美 (2014b) 「品詞比率からみる中古和文テキストの特徴」『日本語学会2014年度春季大会予稿集』、pp.185-190

関連 URL

日本語歴史コーパス http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/